

小学校と故里

昭和八年六月、佐伯小学校  
創立六十周年記念誌に寄せて

東京都立市 工 藤 好 美

はじめに

この村、この町でも、おとどし、去年、今年と、小学校の調校百周年の記念行事が行なわれ、一段落ついた格好である。たまたま佐伯小学校の六十周年の記念誌で、本会の賛助会員、工藤先生の「追憶」を拝見した。

私は機会を得ず、ご拝見して、ない。十年程前の鶴城高校の同窓会名簿によると、先生は佐伯中学校と大正五年三月に第二回生として卒業（高林伍男氏、深天健一氏、大坂の長谷川等氏らと同級）なされている。

早稲田大学文科に進まれ、最後は青山学院大学教授、英文学部長となさっていたようで、今から四十年ほど前のお元氣一杯のときの文章で、故里のわが学びの庭の追憶のこの文章は、私どもの心をうつものが多い。

おえて無断で掲載するの非礼おゆるしを乞う。  
( 羽 柴 弘 )

小学校は、故里の觀念のうち、一つの最も重要な部分をお占める。

父母の家があり、自分がそこに生まれたというだけでは、故里の感情は充分に持てないである。幼い日の妻びと悲しむ、少年の夢と現実とが齟いませられてこそ、初めて故里の情趣が完全なものになる。そして少年の日の大部分が、小学校ですごされるものであるとすれば、

人がそれぞれの故里に対して持つ思想や感情のうち、小学校が、いかに重要な役割をはたすかということが、容易に理解される。

さまざまに異なつた土地に住み、おまたの人々に接しているうちに、私は、思ひの氏が多くの人々が、生まれ土地と学んだ小学校とを異にし、誕生の地と母校の所在地とのいづれをより適当に故里と稱すべきかについて、とまどつてゐることを知つた。このような人は、あまりに大きな都会に生まれたとおなじように、故里の純一な感情を持つことが困難である。

私自身は、父母の家と母校——この言葉は、中等学校以上の学校でなく、小学校のためにもみ作られたかのようである——を、ほどよい大きさの城下町のうちに持つ、少数の幸福者の一人である。

私が佐伯の小学校に居たのは、明治も終りに近い数年間であつた。

尋常小学校は、なお三の地にあつた。春日玄閣の提灯燈籠が重たげに咲き、夏は驟雨が子供等の叫び声よりも高く、周囲の青葉からふりそそいだ。

晴れた日には手のひら程の草履をひき、雨の日には高下駄の緒をおやうくふみしめながら、私はそこに四年のあいだ通つた。

四年と卒業したとき、日本の小学校令が改正されて六年になり、それと同時に、三の地の尋常小学校は、石段を降りて、下の高等小学校と合併した。そして私は、新しくできた尋常高等小学校は、さらに三分年通つた。

学校の敷地が殆んど二倍の大きくなり、高い二階建の校舎が、広い敷地をとりまくようにして建てられたのもその頃であつた。

それまでの小学校——厳密に言えば高等小学校——の敷地は、現在のものの北半分に過ぎず、南の半分は沼地で、葦草が茂り、そのなかほどに名も知らぬ大木が一つそびえ立っていた。風の吹く日はその梢が、遙か空の秘密を伝えるように鳴り、静かな日は、綿々ような雲がその上にたをざんだ。

私は、よくその下で風上げをした。おりおりは糸が切れて、手許を日なれた風が、学校の裏の丁家の庭に落ちた。祖父母に聞くと、丁家は旧藩時代の御家老の家柄であるそう。そう言えば、落ちた風のとどろきをたずねてその庭に入ったとき、そこで良品のよいお婆さんが、縁側で美しい刺繍をしていた。

それほど古風な小学校であった。尋常科は三の丸から下に降りて北、三の丸の橋門は、運動場から、教室の窓から、なつかしく眺められた。

丁家はその後、地園にひき移られたが、教室で授業を授ける先生の多くは、旧藩時代を直接に、あるいは御両親を通じて間接に、知っていられるように思われた。そして明治の一つの最も成功した制度である小学校教育と、封建時代の名残りが、何の矛盾もなくまじりあいておいて、子供心にも、したわしい故里、故里の学校の雰囲気をかたづけられていた。

回想はつねに保守的である。それは時代の変遷を充分知っていないから、いつまでも昔の思い出にふけり、さしせまって改める必要のないものは、なるべく以前のままであってくれればよいと思う。そしてそのような心は、例えはイギリスの諸大学、オックスフォードやケムブリッジのような学園が、その古い由緒を誇り、昔ながらの校舎や、庭園や、敷石道の石ひとつひとつをも、大切に

保存している気持ちに同感する。

しかし、このような感傷にもかかわらず、日はあらたまり、歴史はすすむ。昔の小学校はもはや今日の小学校でなく、佐伯の町そのものも、二十年前のそれの二倍の大きさになり、住む人々も半分は変わった。そして人々は、よかれおしかれ、このような変化に慣れなければならぬ。何故なら、人は年齢のすすむにしたがって、故里の觀念を改め、拡大するようになるから。

彼は単に自分の生まれた土地だけでなく、彼がそちらに向けて進んでいる世界、彼方の世界をも、魂の故里として認める必要に迫られる。実際、旅人にとっては、その日その日の痛みが故里である。たゞ、最後の目的地は、それらの故里のうち、最も大切な故里であるということができよう。

そして限られた意味に於ける故里、生誕の地——その重要な部分に小学校がある——を恋いたう思いは、私たちが心をして、究極に於ける故里、彼岸の世界に対して準備させ、喜んでこれを迎えることができないうまでも、少なくともこれと和解させるのに彼立ってあろう。

(佐伯) 190 東京都立市栄町一丁目32-17

佐伯の文学碑 — 三の丸 —

中根貞考



ふるさと

移らうも愛し

ふるさと

変らぬわ、うー

はしきふるさと